大きな秘密、小さな秘密

永島園子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大きな秘密、小さな秘密

【Ｎコード】
Ｎ２１９７ＢＡ

【作者名】
永島園子

【あらすじ】
アンドレアス・ノイマンには、幼いころの記憶が無い。命の恩人で主のロベルトは賢王の誉れ高い人物だった。アンドレアスは主を心から尊敬し真心を込めて、日夜侍従としての職務に励んでいる。王の覚えもめでたく、貴族たちにも一目置かれる存在となったアンドレアスには……特別な秘密が有った。

侍従・１（前書き）

Ｒ１５は保険です。

侍従・1

贅を尽くした寄木細工の床に白大理石の柱、部屋の真ん中には巨大な四柱式ベッドが有り、そのわきには繊細な細工を施された猫足の机と椅子、部屋の隅の赤々と火が燃えている暖炉の前には高価な絨毯が敷かれ、その上に繻子張りの優美な寝椅子が置かれている。

若い小柄な侍従は暖炉の火を見つめながら、主のいない寝室で泣いていた。

真面目で仕事熱心であるから、仕えている王が不在でも王の許しなく椅子に座ったりベッドに腰掛けたりなど、決してしないのだ。侍従は王に仕えて五年になる。もともとは王の治める国の人間では無かった。九歳のころ飲まず食わずで戦場でさまよっていた所を、運よく王に拾われたのだ。侍従は命の恩人で主で、武芸や学問の師匠でもある「国王陛下」を心から尊敬していたし、感謝もしている。実際まだ青年といってよい年頃の国王は優れた政治家で、国一番の武人でもある。女性関係がかなり放埒でだらしない事を除けば、尊敬できる人物で、気前は良いし、思いやりも有る。実際、若い侍従は王を……ほとんど崇拝していると言っても良い。

「陛下、僕は……」

侍従は暖炉の火を見つめながら、知らず知らず大きな黒い瞳から、涙を流し、すすり上げていた。以前はこんな事は無かったのだが、この所、主がどこかの女性のもとに出かけて留守となると、ついこのように涙が出てきてしまうのだ。困った事に。

主の留守中、寝ずの番をしろなどと命じられている訳では無い。自室に下がって休めば良いのだが、主が無事に戻るまで心配で心配で、とても眠れないのだった。

かつてはどこに行くにも何をするにも、侍従は王の供をしたものだが、一昨年から愛人やなじみの娼婦の所を訪れる時は、供を命じられなくなったのだった。厳つい体つきの護衛三人は相変わらず供をするのに、自分だけ外された事が心外だったが、侍従という立場ではそのような事を主に向って言うべきではないし、実際、侍従はその件に関して何も王には言っていない。

こうした場合、通常は王は朝食の時刻まで宮殿に戻らない。だが、その日に限って何がどうなったのか侍従には分からなかったが、気が付くと自分は暖炉の前の寝椅子に寝かされていたのだ。　泣き疲れて眠っていたらしい。大きなベッドには主が一人で眠っていた。耳を澄ますと健やかな寝息がかすかに聞こえる。それを聞くと侍従は心からホッとした。自分の体には王が微行の際に愛用しているコートが掛けてあった。恐らく王が掛けて下さったのだと、侍従は理解した。王が愛用している香水の香りがほのかに感じられる。この香りは、どこか深い森の奥の清らかな泉のほとりを侍従に思い起こさせる。深みがあって謎めいていて爽やかで胸の奥がざわめく、そんな魅力的な薫りを味わってから、主のコートを型崩れしないように丁寧に付属の衣裳部屋に収めておく。

先ずは自分自身の身支度を直さねばいけない。顔を洗い、髪をとかして黒いリボンで結ぶ。下着はすべて新しいものに着替える。下着は重要だ。ことにこの侍従のように秘密を持つ者には。

下着類はすべて白い。シャツも白いが、後は黒づくめだ。タイも上下の仕着せも靴下も靴も。侍従の目も髪も黒いので、それに合わせるようにと言う王の意向なのだ。ただ一つ、王が昨年与えた勲章だけが華やかな色合いを放っている。宮中に潜り込んでいたスパイ組織を摘発した功績によるものだ。それ以降、若い侍従は「黒の侍従」とか「黒い懐刀」とか言われて、権勢を誇る貴族たちにも一目置かれ、恐れられるようにもなった。王は貴族に任じるつもりだったが、自身の領地や召使の管理など役目を果たす上で鬱陶しいだけ

だと言うような事を言って固辞した。そして、これからもただ身近で仕えたいと強く願った。貴族の中には、真実それが侍従の願いであるのかについては疑う者も有ったが、王は若い侍従の願いを理解してくれた。
邸や領地を頂かない代わりに、宮殿で王の私室に最も近い部屋を賜った。そして若い大貴族の子弟の歳費に相当する年金を支給して下さっている。それで十分すぎるほどだと侍従は思っている。

王が目覚めたとあれば、他の者達にも呼び鈴を鳴らして知らせ、まずはうがいと洗顔の介助である。整髪と髭剃りは王専属の理髪師に任せる。衣装の着付けだが、下着の着替えは専属のメイド二人と三人がかりで素早く行う。襟付きのシルクのシャツを着せ、ズボンや靴下を穿かせ、クラバットを結び上衣を着せるのは侍従の役目だ。

「やはり、お前が結ばないと襟元が決まらないな」
「恐れ入ります」

毎朝、ほぼ同じ言葉を互いに繰り返しているが、王が自分のクラバットの結び方を気に入ってくださっていると言うのは、侍従に取って非常に重要な事なのだった。そして、その言葉を殆ど合図のようにして、理髪師とメイド二人は王の御前を退出する。入れ違いに朝食が運ばれてくるのだ。毒見も侍従の重要な役目であった。
まずは、王が食事の最初に飲む澄み切ったコンソメスープを一匙、王自身のスプーンですくって毒見用の小さなカップに入れてもらい、飲む。王自身のスプーンに毒を仕込む場合もありうるから、この手順は省けないのだ。

「これは美味そうだな」

王自身の手で、黄金色に輝くオムレツを真ん中から二つに切り、

ひとかけらを毒見用の銀食器に乗せる。侍従は恭しくいただき、咀嚼音その他のぶざまな音を立てないように万全の注意を払って優雅に美しく毒見をするのだ。これで王のナイフフォークにもオムレツにも毒が無い事がはっきりする。

「まことに結構でございます」

「そうか」

同様の手順でハムなどの加工食肉、魚の燻製もしくはマリネ、サラダ、果物と手順良く、毒見をする。　朝食の席で、王は侍従がどの様に食べ物を食べるかしばしばじっと見つめる。侍従の好物が何であるのか、自然と理解しているのは確実で、王が明らかに毒見の量よりも多目の量を取り分けてくれるのも、侍従の好物のオムレツと大好物の果物類は半分ほど侍従に食べさせるのも、王の心遣いのようだ。

朝食には菓子パン類も供されるのだが「気に入ったのなら、お前が食べろ」と言われる事も珍しくない。

食事中に飲む茶は、侍従が淹れる。無論、これも王のカップに注いだ上で、一匙だけ毒見する。

「毒見など面倒極まりないなあ。どうせならお前と一緒に食事をした方が、よほど気分が良いと思うのだが、それを口にすると老人どもがうるさいだろうか……」

王のお気持ちは有り難いが、恐れ多い。自分はただの侍従であるのだから。そのように若い侍従は感じている。

国王・1

「もっと、そのオムレツも食べよ」

そう命じると若い侍従は顔を一瞬赤らめて、それから静かにオムレツを口に運ぶ。桜色のくっきりした形の整った唇。薄っぺらでもなく、厚ぼったいわけでも無い。確かにこの唇は少女のものだ。普通の男子なら髭の一本や二本、痕跡が見当たりそうなものなのだが、ほのかにバラ色のさす白いきめ細やかな肌の上にはまるっきり見いだせない。やはり、この侍従は少女なのだ。改めてロベルトは気品がある愛らしい顔をまじまじと見る。もっと髪を伸ばして高く結い上げ、最新流行のドレスを着せたらどうだろうか？　ふとそんな想像をしてみる。おそらく……自分の愛人の誰よりも目を引く美しさであろうと、ロベルトは思う。

仮にこの侍従はアンドレアス・ノイマンと名乗らせてはいるが、本人が幼いころの記憶があいまいなため、本来の名は主人であるロベルトも知らない。

そもそもアンドレアスはロベルトがまだ王太子であった頃に、狩猟をしていて出くわした孤児だったのだ。幾日もろくに食べて居なかったようで、体中が針金のように痩せ細っていた。黒い瞳で見つめられて、見捨てる事など出来なかった。馬に乗せて宮殿に連れ帰ったのだが、恐ろしく体が軽かった。赤ん坊の死体を抱きかかえていたが、説得して土を掘り埋葬した。自分も飢え死に寸前というありさまだったのに、赤ん坊をずっと抱えて来たらしい。後で聞けば、どうやら内乱状態の神聖帝国から黒い大きな森を抜けて、王国側に出たらしかった。大人達は皆殺害され、住まいを焼かれたと言う。どの様な経緯が有ったのやら、事情は分からないが、ともかくも幼い子どもには過酷すぎる状況を生き延びたのは確かなように思われ

た。そのせいか記憶の一部があいまいになっており、自分の年齢が九歳だということは認識していたが、自分の名前はどうやら本当に思い出せない様子であった。亡くなった赤ん坊は妹というわけでは無いようだった。死の直前の赤ん坊の母親から、連れて逃げて欲しいと懇願されたと言うのだ。

「だんだん、この子の泣く声が小さくなって、もう聞こえなくなっちゃったんだ。どうしよう」

そう訴える子供の髪は自分自身で切ったそうで、牢屋に入れられた罪人のように非常に短かった。短かっただけでなく、所々地肌がまだらに透けて見えるお粗末さであった。着ている服は男の子のものであったし、「僕」と自称していたし、仕草や言葉から、てっきり少年に違いないと思ってアンドレアスという名を与え、本人の希望もあって身近に置く事にしたのだ。

以来アンドレアスは行儀作法も武芸も学問も懸命に学び、仕事ぶりも熱心で手際も良い、なかなかに優秀な侍従となったが、思わぬ事で少女であったことが判明した。

アンドレアスが十歳の年に、ロベルトは即位して国王となった。愛らしい侍従は懸命に務め、十二歳になるころには名実ともに王の側仕えにふさわしい人材に育ちあがっていた。それが……アンドレアスが十四歳を過ぎた頃であったか……真っ青な顔をして腹を抱え、ズボンにかなりの血が滲んでいる状態で寝椅子で転寝しているという状態にロベルトは遭遇してしまったのだった。急ぎ乳母のノイマン夫人に、医師を手配させた。

「この方はれっきとした女性で、初潮を迎えられたのです。病では御座いません」

その医師の報告を聞いて、ロベルトは自分のうかつさに舌打ちし

たい気分になったものだ。乳母のノイマン夫人はどうやらかなり以前から、小さな侍従の秘密に気付いていたという。引き取って以来アンドレアスの教育係で、親代わりでもあり、今では本当にアンドレアスの養母でもある関係なので、当然と言えば当然であったかもしれない。

「陛下は御存知なのだとばかり思っておりました」

そのように言ったノイマン夫人とは口裏を合わせ、ロベルトは侍従が実は女である事を今も知らないふりをし続けているのだ。

そのノイマン夫人は白髪になっても美しく優雅で忠実無比だが、無口で人の好き嫌いがはっきりしており、なかなかに気難しい。だが小さな侍従の事は最初から可愛がっており、何くれとなく面倒を見てやっていたようなのだ。ノイマン夫人は戦争未亡人で実子も病で亡くし、天涯孤独の身の上であったから、アンドレアスの正式な侍従就任に合わせ、ロベルトの「お声がかり」で養子縁組をさせたのだった。従って、今ではアンドレアスはノイマン夫人を「母上」と呼んでいる。

ノイマン夫人の協力も有って、アンドレアスは男として貴族たちに認識されているのは間違いないようだ。熱心に学び、武芸の研鑽も怠らない。理路整然とした話しぶりも、颯爽とした身のこなしも、上流の青年のそれであって、女性には確かに見えないだろうとロベルトは思っている。女官達はアンドレアスを前途有望な美しい青年と見ているようで、時折付文を渡されているようだ。

「先ほどなかなかに愛らしい女官見習いから、文を貰っていたようだが、どうする？」

面白半分にロベルトが問うと、アンドレアスは顔を赤らめ、生真

面目な調子でこう答えるのだ。

「僕は国王陛下に命を救って頂き、取り立てて頂きました。今はまだ十分に御恩返しも出来ていませんから、女性と付き合うなどと言う気分にもなりませんし、その時間もございません」

なかなかに負けん気も強く、四、五歳年かさの青年たちを相手に、剣でも馬術でも学問でも政策論争でも、一歩も引かない見事な戦いぶりだ。まったく化粧気のない顔は凛々しい。それでも本当の男とは異なり、顔の輪郭も繊細で優しげだ。女にしては背が高いので、少し小柄な男にも見える……はずだが、一旦実は少女だと知ってしまうと、ロベルトの目にはどうしても男には見えなくなってしまっている。

食事をする時も、つい、年若い女なのだと言う意識が働く。だが、愛人とかなじみの娼婦のような相手とは勝手が違う。ロベルトには妹はいないが、いたらこのような感じであったのかもしれないなどと思う。

「育ち盛りなのだからな、もっとちゃんと食べるのだ」

食事の際も、ついそのような事を口走ってしまう。だが、どうなのだろう。胸元は特殊な下着で押さえ込んでいるらしいが、これからますます女らしい丸みを帯びた体が出来上がっていくはずなのだ。不自然な現在の状況をいつまでも続けさせて良いものかどうか、悩むところだ。このまま「アンドレアス・ノイマン」が成長するのを見たい気持ちが有る一方で、女として装わせた姿を見てみたい……とも思う。

だが、それにしても、この侍従の本来の名前は何であったのか？

気品有る優美な面差しは、とても名も無い庶民の血筋とは思えない。そういえば、養母となったノイマン夫人の面差しとどこか似通

ったものを感じるが、本当の所、二人は赤の他人なのだろうか？
ロベルトが幼い時分に聞いたノイマン夫人の身の上話では、ノイマン夫人自身も王国の生まれではなく、黒い森の向こうの今は滅んだ神聖帝国の「ちょっとややこしい家」の娘だと言っていたことが有る。どうややこしいのかについて、その後尋ねた事は無いが、一度きちんと話を聞いておくべきなのかもしれないと、ロベルトは思うのだった。

国王・1（後書き）

誤字、見つけ次第訂正していますが……御指摘大歓迎です

ノイマン夫人・1

青年国王ロベルトの乳母であるノイマン夫人は、名をセシリアと言い、王国の貴族では無い。だが、貴族に準じた扱いを受け、王宮内では誰にも一目置かれる存在だ。戦死したノイマン夫人の夫は先代国王の信任厚い軍人であった。それも並みの軍人ではなく諜報工作の責任者であったらしい。

ロベルトが身体壮健・眉目秀麗な青年であるだけでなく、善政を敷き、一度は傾いた王国の財政を立て直すような優れた国王となったのは、生まれついての素質以上にノイマン夫人の厳しくも献身的な養育によるところが大きいと広く認識されているのだ。

ロベルトは生まれながらの王太子であったが、生母の王妃は産後の肥立ちが悪く、ロベルトが初めての誕生日を迎える前に亡くなった。その、母親との縁が薄い跡取り息子の養育を、若い戦争未亡人で一人息子を亡くしたばかりのノイマン夫人に委ねたのは、先代の国王だった。

「亡き息子が生きていたならばどう育てたか、そして将来王になる子供には何が必要か、常に意識して育ててほしい」

その先代国王の言葉は、ノイマン夫人の養育方針を決定づけた。母を失った赤子と息子を失った女は、たがいに寄り添うようにして、瞬く間に強いきずなを結んだ。幾度か幼いロベルトは病に見舞われることが有ったが、ノイマン夫人の献身的な介護でいつも無事に乗り越える事が出来た。少なくとも先代国王はそのように語っていたし、人々もそれを認めていた。だが、ノイマン夫人としては「当たり前の事」をしただけだと思っていたので、先代国王の言葉はいささか面はゆいのだった。

ロベルトが一歳を過ぎる頃から、ノイマン夫人は砂遊びをさせたのだが、砂は清潔なものを吟味し、庭師の手で丁寧にふるいにかけ、異物の混入が無い事を確認していた。最初の頃は自分で掘り返すより、庭師たちがあらかじめ作った山を突き崩す事にロベルトは夢中になっていた。二歳になって型抜き遊びをする頃になると、貴族や軍人・学者・豪商の家庭で同じ年か、少し年上の兄弟姉妹がいる健康で性格の穏やかな幼児をノイマン夫人が五人選び、一緒に砂遊びをさせた。幼い子供同士揉めると、ノイマン夫人は如何なる場合も相手の子供に謝らせたが、そうした場合は必ず「ロベルト様が王太子でいらっしゃるから、御身分に遠慮させたのです」と言い、砂遊びは中断させて子供たちを帰宅させるのだった。ロベルトは厳しく叱責される訳ではなかったが、自分のわがままで遊び相手が気分を害すると、楽しい遊びも止めになってしまうという事を幾度も体験して、四歳になる頃にはごく自然に遊び仲間に気配りが出来る子供になった。

仲良く遊んでいれば、ノイマン夫人が口をさしはさむ事はほとんど無く、ロベルトの自由にさせた。だが、遊んでいるロベルトの側で編み物や刺繍をしながら、常に目配りは怠らなかった。

砂遊びがしにくい晩秋から冬に掛けては、室内の床に白い大きな布を広げ、好きなように絵や模様を書くと言う遊びをした。やがてその布に陣地や道を書き、その上におもちゃの兵隊を置いたりして遊んだりもするようになった。あるいは紙芝居や絵本の類をノイマン夫人が読む、という事も有った。

ロベルトを含めた六人で、ほぼ毎日のように一緒におやつを食べたが、その際も「仲良く楽しく食べるにはどうすれば良いのか」をロベルトにノイマン夫人は考えさせたのだった。仲良しの子供の好みや、皆が楽しめる趣向について考える事が、マナーや社交術の基礎となった。

五人の子供たちはやがて、ロベルトの学友となり、有能な廷臣となって、今やこの国を支える人材に育っている。その五人が五人ともノイマン夫人には頭が上がらないのだから、宮廷における夫人の立場が強固になって行くのは、自然な流れなのだった。

だが、どれほど権勢を握ろうとも、ノイマン夫人は昔と変わらず黒一色の飾りの無いドレスを纏い、亡き夫に贈られた指輪以外の装身具は身に着けない状態を保っている。王となったロベルトは長年の功績に対して、爵位と領地を与えようとしたが、それを固辞した。そのかわり可能な限り宮中に伺候し続ける事と、優れた軍人であった亡き夫の最期の地に、顕彰碑の建立を願ったのだった。

ロベルト国王は忠実なノイマン夫人の願いを受け入れ、他に終生の年金の支給と、身寄りのいないアンドレアスを養子に迎えさせる事を決めた。

「アンドレアスという名前は男の名だけれど、お前は女の子よね。本当の名前は何というのかしら？」

国境近くでロベルトが拾った戦災孤児らしい子供は、身なりは男の子だったが、実は少女だった。ノイマン夫人は風呂の世話をしてやったし、着替えの手伝いもしてやったから、アンドレアスが秘密だと考えている事は、夫人にとっては秘密でも何でも無いのだった。

「いくら考えても思い出せません。アン……何とかだろうとは、思うのですが、その名前を呼んだはずの両親の記憶がはっきりしないのです」

ロベルトが連れて来た最初の日のアンドレアスの髪型は、ところどころムラになって地肌が透けて見えるようなひどいものだった。更には左のこめかみから後頭部にかけて比較的新しい傷が有った。どうやらその傷は自然に塞がっていたようだったが、自分の名前を

覚えていないのが本当だとすると、怪我はかなりひどいものであったのだろう。もしかしてこの少女は、何かの事件なり事故なりに巻き込まれた被害者なのかもしれないとノイマン夫人は考えている。

というのも、ノイマン夫人自身が複雑な出生の秘密とやらを抱え込んでいたようで、幾度か理不尽にも殺されかけたのだ。それを避けるには他国に逃亡するしかないと悟り、親切な猟師の老人の手引きで帝国側にやってきたのだ。薬草取りの老婆の小屋で厄介になっていた所、負傷したマウリッツ・ノイマンを救った事が機縁となり、隣国からの密入国者であったセシリアは軍人の妻となり、晴れてセレイア王国の国民となったのだった。

五年余りの結婚生活は幸せであったし、夫と息子を亡くした後は一心に世継の王子の乳母として務めていたので、生まれた土地のことなど考えたことも無かったのだが……自分とどこか面差しの似たアンドレアスを引き取って以降、ノイマン夫人は自分自身の遭遇した理不尽な災厄について、あらためて考える事が多くなった。

亡き夫マウリッツによれば、セシリアは生国である神聖帝国の皇族だった可能性が高いのではないかと推理していた。神聖帝国は歴史ばかりがやたら長かったが、セシリアの生まれた頃には建国当時の勢いはとうの昔に無く、領土も十分の一以下になってしまっていた。統治者は皇帝と呼ばれていたが、実態は小国の王と言って良い。だが他国の王家よりうんと家柄が古く、由緒正しいという事を大いに誇っていた。「いた」というのは、セシリアがマウリッツ・ノイマンと結婚して以降になるが、深刻な帝位継承をめぐる争いが起き、その結果近隣の諸国の介入を招き、内乱がおきて、結局は国が滅んでしまったのだ。

夫は戦死する寸前まで帝国の皇族の行方について調査していたようだ。どうやら先王の指示であったらしい。夫が亡くなり生まれた国が滅び、調査を命じた先王も亡くなられた。その詳細な報告書は夫の生前のままの状態の書斎にしまってあるが、セシリア自身が目

を通したことは一度も無い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2197ba/

大きな秘密、小さな秘密

2012年1月6日01時52分発行